

# 十五・十六世紀における流通・海運の変革 東海地方港津遺跡の検討 尾野善裕

The Evolution of the Distribution and Marine Transportation in 15th-16th Century Japan: A Study of Port Sites in the Tokai Region

はじめに

- ①「五・六世紀考古遺物の年代観と港津遺跡の廃絶・衰退時期
- ②港津遺跡廃絶・衰退時期の歴史的状況
- ③出土資料による「五・六世紀の物流変革とその背景
- ④中世海運における安濃津の位置づけをめぐつて  
おわりに

## [課題]

近年、東日本の太平洋海運に関する研究では、明応七年（一四九八）に発生した地震が東海地方の港津に与えた影響の大きさが強調される傾向にある。しかし、その実例とされてきた港津遺跡の年代について、改めて考古資料から検討してみると、廃絶・衰退時期には微妙にずれがあることが判り、一時的な自然災害が港津の廃絶・衰退の決定的な要因であったとは思われない。

むしろ、十五世紀から十六世紀にかけて廃絶・衰退する港津が少なからず存在することは、物流の変化を反映したものではないかと考えられ、この時期の地域経済の変容を具体的に確認できる現象として、遺跡から出土する陶磁器の絶対量が急激に増加することが挙げられる。また、陶磁器消費の絶対量が急増するのと規を一にして、東海地方各地で京都文化の影響を強く受けた土師器の皿が目立つ存在になるが、こうした現象の背景には京都文化に慣れ親しんだ人々の地方下向と定住を想定できる。

考古資料から推測されるこれら一連の現象は、明応年間かそれを大きく超らない時期に起きていているとみられ、時期的な一致から考えると、陶磁器や土師器皿の大量消費に現われている地域経済の変容は、もともと在京を原則としていた守護・守護代・奉公衆などの在国化が大きく関わっている蓋然性が高い。

応仁・文明の乱以降、明応の政変などを通じて進行する守護・守護代・奉公衆などの在国化が、東海地方のみに限られる現象ではないことを考えれば、同様の地域経済の変容は、他地域の考古資料の分析からも確認できるのではないかと思われる。